

# 日大土木会会報

発行：日大土木会広報部会

〒101-8308

東京都千代田区神田駿河台1-8

日本大学理工学部土木工学科内

TEL：03-3259-0662

FAX：03-3293-3319

http://www.nu-dobokukai.com

## 日大土木会 新会長に 理工・土木卒 神保廣光氏

令和五年の通常総会において、本会の新会長に理工学部・土木工学科・昭和五十年卒業の神保廣光氏（株）エイト日本技術開発）が一場駿会長の後任として新会長に就任されました。任期は二〇二五年の総会日までの二年間であり

ます。神保新会長は、これまで本会では副会長（業務部会長）を務めてこられ、「土木の魅力の伝承」をキーワードとした卒業生による学生への講演会などを企画してこられました。最近では、元職であるUR（都市再生機構）職員を講師に迎え「東日本大震災の復興

『日大土木会  
会員の皆様へ』

神保廣光

神保新会長は、これまで本会では副会長（業務部会長）を務めてこられ、「土木の魅力の伝承」をキーワードとした卒業生による学生への講演会などを企画してこられました。最近では、元職であるUR（都市再生機構）職員を講師に迎え「東日本大震災の復興



新会長に就任した神保廣光氏

げます。

平成五年七月の役員会、総会で一場駿様から交代いたしました。神保廣光（昭和五十年理工学部土木科卒）で、約三十年間UR・都市再生機構勤務後、現在は土木総合コンサルタント勤務でございます。この度、会長就任に当たり、日大土木会の会員の皆様方へご挨拶文を執筆いただきましたので、ここに紹介させていただきます。

一場前会長（令和三・四年）の時は、令和二年からの新型コロナウイルス感染症の全世界への拡大に伴い、様々な行動制限により、本会の活動も制限され、総会は書面審査で行い、徐々にリモート会議などの一般化により、昨年度の総会は特別講演を（ZOOM）で配信する等、行動制限がある中でも、できるだけ会員の皆様への情報発信を行う等の工夫が行なわれました。一場前会長、事務局の鎌尾先生のご苦勞には感謝致します。

日大土木会は、3学部4学科（理工学部土木工学科・交通工学科「現交通システム工学科」、生産工学部土木工学科、工学部土木工学科）の卒業生で平成十二年に設立されました。故山田清臣先生、森元峯夫様、故松田慎一郎様、竹澤三雄先生や歴代会長や諸役員の方々が築き上げた

てこられた各種支援事業を各部会の活動を通じて行い、在学生の教育支援のための講演会、研究会を実施、その他、日大土木会報の発行、各学科には教育補助費等による支援を行っております。日大土木の創設は大正九年（1920年）に日本大学高等工学校として、土木科が私学で最初設置され、さらに第一回卒業生が社会に出た翌年に関東大震災（1923年）が発生し、復興事業で大いに貢献した先輩のおかげで「日大土木」の名声が世に広がったとも伺っています。2020年（令和二年）に日大土木創設百周年を迎え、東京オリンピックは観客制限の状況で開催される中、令和三年の日大土木創設百周年のセレモニーは中止となりましたが、記念誌は本会の監事の重村先生他「編集委員」の皆様のご努力で発行されました。感謝申し上げます。

工学が社会で貢献しているか、重要なことを知らせることが伝統を守ることであると考へ、引き続き土木系三学部四学科の主任教授の先生方のご意見も伺いながら、学生の支援を各学科との連携を一層深めて実施したいと思っております。

新年度の体制はこれまでに引き続き、鎌尾彰司氏、盛武建二氏、梶山修氏、鈴木宏氏、山本忠幸氏、前会長の一場駿氏に加わって頂き七名の副会長の体制といたしました。コロナ禍や会員の高齢化も影響していると思いますが、理事等役員は減少しております。コロナ禍で会合の制約される中、会員の皆様から「日大土木会」の連携に向け、名簿を作成しては等のご意見を頂いています。個人情報等にも留意しながら、作成できればと思っております。

最後にになりましたが、皆さま方の本会へのさらなるご指導・協力をお願い申し上げます。会長就任の挨拶とさせていただきます。

（各学科二万円）  
会報（三〇号、三二号）  
の発行  
学生向け特別講演会の開

## 令和五年度 通常総会 開催報告

令和五年度の通常総会は、去る七月二十二日（土）、理工学部の新校舎にて対面式で開催されました。

各議案の議決につきましては会則に基づき、出席者の過半数で承認となります。

審議の結果、各議案とも全会一致で事務局提案の通り承認されました。承認された議案は以下の通りです。

### 【第一号議案】

- （一）令和四年度 収支決算報告及び監査報告表あり
- （二）事業報告（抜粋）
- ・会員数：一一七名
- ・年度内入会：三名
- ・同 退会：十一名
- ・同 逝去：八名
- ・土木系三学部四学科への教育補助金の贈呈を実施
- （各学科二万円）
- ・会報（三〇号、三二号）の発行
- ・学生向け特別講演会の開



第 1 号議案

令和 4 年度 収支決算

(1) 収支決算総括表

(令和 4 年 4 月 1 日から令和 5 年 3 月 3 1 日まで)

収 入	885,834 円
支 出	553,607 円
次年度繰越収支差額	354,439 円

1) 収入の部

金額単位：円

科 目	予算額	決算額	増減
会費収入	600,000	528,000	▲72,000
総会収入	10,000	0	▲50,000
雑収入	0	1	1
前年度繰越金	357,833	357,833	0
収入合計	967,833	885,834	

2) 支出の部

金額単位：円

科 目	予算額	決算額	備 考
1. 事業費	210,000	193,569	
印刷製本費		108,569	会報制作及び印刷
学生教育補助費		80,000	各学科2万円×4学科
雑費		5,000	総会補助謝金
2. 管理費	400,000	337,826	
通信運搬費		261,082	総会案内・会報発送
手数料		22,212	会費振込手数料
消耗品費		50,090	封筒代
会議費		4,442	お茶代等
3. 次年度繰越額	357,833	354,439	
支出合計	967,833	885,834	

第 3 号議案

令和 5 年度 予算案

1. 収入の部

金額単位：円

科 目	令和 5 年度予算額	令和 4 年度決算額	備 考
収入			
会費収入	700,000	528,000	年会費
その他収入	50,000	0	総会費・利息他
前年度繰越収支差額	354,439	357,833	
収 入 合 計	1,104,439	885,833	

2. 支出の部

金額単位：円

科 目	令和 5 年度予算額	令和 4 年度決算額	備 考
事 業 費	250,000	193,569	総会・懇親会・印刷製本・講演料・学生教育補助・旅費等
管 理 費	500,000	337,826	消耗品・通信運搬・名簿作成準備費等
予 備 費	0	0	
次期繰越金	354,439	354,439	
当期支出合計	1,104,439	885,834	

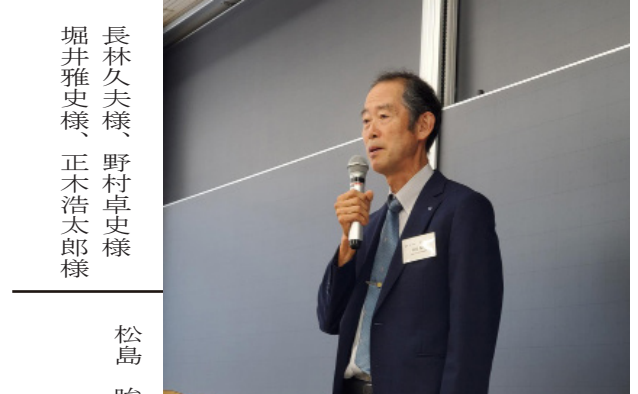
【第二号議案】  
 (一) 令和五年度  
 事業計画(抜粋)  
 ・名簿・会報(第三十二号及び第三十三号)の発行  
 ・ホームページによる情報発信  
 ・会則・細則の見直し  
 ・学生向け講演会の開催  
 (令和五年六月九日)

【第三号議案】  
 (一) 令和五年度予算案に関する件(表あり)  
 (二) 役員の改選  
 改選された新役員は以下の

特別講演会(令和五年七月二十二日)の実施  
 ・土木系三学部四学科への教育補助金の贈呈  
 ・研究発表会の開催支援  
 ◎新任役員の紹介(五名)  
 新会長  
 神保廣光…昭和五十年  
 理工・土木卒  
 新副会長(一名)  
 一場 駿…昭和五十一年  
 理工・交通卒  
 新理事(二名)  
 加藤 巧…昭和六十二年  
 理工・土木卒

阿部紀征…平成八年  
 理工・土木卒  
 新監事(一名)  
 仲村成貴…平成七年  
 理工・土木卒  
 (敬称略・五十音順)  
 また、これまで理事として本会を支援して頂きました次の七五名の方が退任されました。これまでのご尽力に感謝申し上げます。ありがとうございます。  
 折敷秀雄様、佐伯謹吾様

【特別講演会】  
 通常総会終了後に特別講演会を開催しました。  
 第一部として、土木系4学科主任教授による「学科の近況報告並びに「挨拶」。  
 第二部として、首都高速道路(株)に勤務されている丸山大貴氏を迎えて「首都高速の日本橋プロジェクトに関する講演」の2部構成として開催しました。  
 第一部の各学科主任教授の挨拶文につきましては、前号の会報(第三十二号・本年六月発行)に掲載させていただきましたので、ここでは



新会長に就任され挨拶する神保廣光氏



通常総会の会場の様子

特別講演会・懇親会も開催

当日の写真のみのご紹介とさせていただきます。  
ここでは、第2部の講師を務めていただいた丸山大貴さんに講演要旨に関する原稿を執筆いただきましたので、紹介させていただきます。

「特別講演・日本橋に青空を！」

首都高速道路(株) 日本橋プロジェクト課



小早川悟先生 (理工学部交通システム工学科)



中村英夫先生 (理工学部土木工学科)

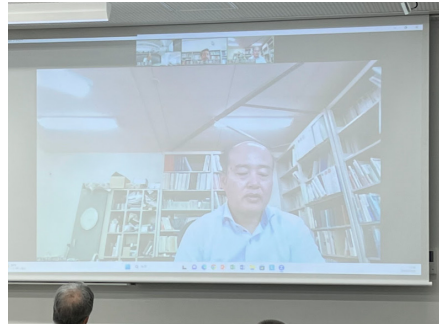


丸山大貴

二〇二〇年に大学院を修了し、社会人四年目を迎えた首都道路株式会社の丸山大貴です。この度は日大土木会にて特別公演に参加させていただきました。



佐藤克己先生 (生産工学部土木工学科)

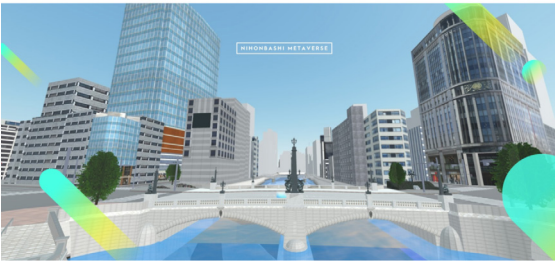


仙頭紀明先生 (工学部土木工学科)

特別講演会(第1部)で学科近況報告される土木系4学科主任教授(対面及びオンラインでの講演の様子)

きありがとうございます。私が所属している更新・建設局・日本橋プロジェクト設計では、「日本橋に青空を」をコンセプトに、神田橋JCTから江戸橋JCTまでの約1.8kmを事業区間として、高架橋である既設高速道路心環状線を地下化する事業の設計を行っています。契約手続き中につき、詳細な内容等をお話しできず大変恐縮です。

『首都高速道路 日本橋区間地下化事業の概要と契約手法』



丸山 大貴

首都高速道路株式会社 更新建設局 日本橋PJ設計課

特別講演会での講演資料より  
「常盤橋地区トンネル工事」を担当しております。該当地区はJR線や地下鉄及び地下埋設物などが輻輳しており、まさに針の穴を通す地下化ルー

が、本講演でお話させていただいた内容を一部紹介させていただきます。  
【日本橋区間地下化事業の概要】都心環状線の神田橋JCT〜江戸橋JCTは、一九六四年の東京オリンピックの開催に向け、日本橋川の上部空間に建設された区間です。開通から五〇年以上が経過しており、コンクリート床版の亀甲状のひび割れや鋼桁の切欠き部の疲労き裂等の重大な損傷が多数発生している等、過酷な使用状況にあることから、2014年に大規模更新による高架での造り替えが事業化しました。その後、日本橋川周辺の再開発地区が国家戦略特区の都市再生プロジェクト

に追加されたことにより、まちづくりの機運も高まり、2017年7月に国土交通大臣および東京都知事から日本橋周辺のまちづくりと連携した日本橋地下化に向けて取り組むことを発表されました。国、東京都、中央区、首都高速道路株式会社にて計3回行われた首都高日本橋地下化検討会により、地下化ルートや事業スキームについて検討され、2019年10月に都市計画変更、2020年4月に都市計画事業認可を受けて、現状は本体工事の工事契約に向けて契約手続きを進めているところである。  
【常盤橋地区トンネル工事】私は新常盤橋から一石橋付近までの約340mの区間を開削及び非開削工事にてトンネルを構築する「常盤橋地区トンネル工事」を担当しております。該当地区はJR線や地下鉄及び地下埋設物などが輻輳しており、まさに針の穴を通す地下化ルー

トの選定が求められます。また、付近にはトーチタワーをはじめとする再開発エリア、国指定史跡の常盤橋門跡、土木学会の推奨土木遺産に認定されている常盤橋、日本橋川など歴史的にも価値のある構造物等への影響を極力抑えた施工が求められます。これらの条件のもと、設計段階から維持管理を見据えて検討することが、将来の維持管理者の負担軽減にも直結するため、特に留意しながら進めております。

講演会の際の質疑応答等で「こんな大変な事は聞いたことない」「ぜひ実現させてほしい」とのお声をいただきました。  
今回は、貴重にも日本橋区間地下化事業についての講演会に参加させていただきました。



小川 勇斗

「講演会に参加して」  
大学院土木工学専攻

「講演会に参加して」  
大学院土木工学専攻  
また、ますます頑張らなければと身が引き締まるとも、大学を卒業してからもOBの方々と様々な観点からお話することができて、とても感謝しております。ありがとうございました。



特別講演会(第2部)での講演風景(首都高速道路(株)丸山大貴氏)

た。講演会では事業概要から契約手法について説明していただきまし。首都高速道路株式会社ピックプロジェクトである日本橋地下化事業は、複数の再開発事業と連動しており、類を見ない施工制約での施工とのことで、その契約手法も複雑でした。私は来年度から首都高速道路株式会社に入社予定です。このような複雑な工事で自分がやっていると不安に感じることもありませんが、それよりも将来に私も大規模工事で矢面に立ち事業に携わりたいという期待に胸が膨らみました。またこのような貴重な機会を頂戴頂けたことに改めて感謝申し上げます。

した大学院学生も加わり、始めやかなムードで懇親を深められておりました。

**学生向け・特別講演会報告**

本会の令和5年度の事業でもある学生向けの特別講演会を開催しましたので、講師を務められた野呂祐介氏(平成十二年工・土木卒・都市再生機構・東日本賃貸住宅本部)に開催報告を執筆いただきましたので紹介させていただきます。

**「特別講演会開催報告」**

野呂 祐介

**【懇親会】**

総会及び特別講演会終了後に1階カフェにおいて懇親会を開催しました。懇親会には元日本大学副学長の落合実先生もお越しになられ、加えて総会出席者、特別講演の講師を務めた首都高速道路丸山大貴氏及び対面に参加していた交通システム工学科主任の小早川悟教授も参加され、さらに特別講演会を聴講

令和五年六月九日、大学院理工学研究科土木工学専攻の「地盤防災特論」の授業の一環として(約15名)に災害対策の実務的な立場で、昨年度に引き続きUR東日本賃貸住宅本部の野呂祐介氏(平成十二年工学部土木工学科卒)に「URの震災復興支援の取組みについて」講演頂いたので報告します。URの復興支援の取組みの講演は今年で十年目になります。野呂氏

はニュータウン事業(本社及び現地等の工事監理業務)に約十年間(H18年〜H29年)従事され、震災復興支援では平成30年〜令和2年まで、宮城県の南三陸復興支援事務所で工事監理の業務を担当されました。

理工学部新校舎(タワースコア)での講演は、昨年よりも受講対象者が少人数のため、学生諸君に講演内での問いかけの問題を準備頂き、学生との対話形式で進めたいため、災害復興の課題や対応についての認識が深まったと思います。昨年にも増した判り易い資料と例え話なども交えた説明に、学生諸君は傾聴している様子でした。講演の主体である南三陸町の復興支援体験談では計画・復興手順等について具体的に紹介頂きました。

講演の報告は昨年の日大土木会会報(第三十一号)【令和四年十一月号】も併せてご覧頂き、今回の報告は、講演の概要のほか、講演の中で野呂氏が学生諸君に問いかけた問題・回答と、講演後の学生諸君の感想を紹介させて頂きます。

講演は以下の5項目に大別

されます。

1. UR都市機構について  
URは国の政策を実施する組織で主務省は国交省で職員数は約3,200人。URのCMには、吉岡里帆さん、千葉雄大さんにご出演いただいているUR賃貸住宅を紹介するもののほか、南三陸町などの震災復興を取り上げたものもある。
2. URの業務内容は3つの柱  
(①都市再生、②賃貸住宅、③災害復興)に加えて、④郊外環境(ニュータウン)であることが事例とともに紹介された。①都市再生地区:大手町、みなとみらい、渋谷駅周辺、品川周辺地区(高輪グートウエイ駅周辺)、コモレ四ツ谷(四ツ谷駅前)、イケ・サンパーク(池袋の防災公園)、うめきた(大阪駅北地区)など。②賃貸住宅:72万戸の団地の管理(運営やイベント)の開催。多摩平団地、

洋光台団地など。③災害復興:災害発生時は国交省や地方公共団体からの要請により支援実施。④郊外環境:人口増加に対応するため行っていたニュータウン事業。坪井地区(1年生時に通学していた東葉高速、船橋日大駅に隣接した土地区画整理事業地区)やTX沿線地区(三郷、八潮、流山おおたかの森)、アウトレットが立地する酒々井地区や木更津地区など。

3. 東日本大震災における復興支援(支援の概要)

東日本大震災では、震度6強のエリアが直径450km(阪神・淡路・50km)であり、およそ坪井地区から盛岡までと広範囲。また、津波による広範囲な浸水による甚大な被害と、重大な原子力災害が発生した。南三陸町での津波の高さは平均16.5m「遡上高20m以上」であった。

URは震災直後の平成23年4月に17名を派遣した(ピーク時460名(平成28年7月))。URは復興まちづくり支援として、①復興市街地整備…津波被災地は大規模地区中心に12市町・22地区で事業受託し、被災地の土地区画整理事業の約6割(25地区(約1,100ha))を支援。

②災害公営住宅整備…岩手・宮城の市町村整備分の約4割(約5,900戸)

を支援。③コージェネネット業務支援…発注者支援、原発被災地の復興拠点整備の計画受託など。

令和3年度までに津波被災地の復興市街地整備(岩手・宮城)のハード整備支援は完了。現在は主に福島原子力災害被災地域でのまちづくり(大熊町、双葉町、浪江町)7地区(208ha)を約70名体制で支援している。

4. 東日本大震災における復興支援(南三陸の事例)

南三陸町は宮城県の北東部に仙台から車で1時間半の位置。養殖業が盛んでタコが有名(西の明石、東の志津川と言われるほど)。林業も盛んで南三陸杉は新国立競技場でも使われている。



学生向け特別講演会の様子

東北地方の他の震災地域と同様、津波被害が甚大だった。多くの町民が住む志津川地区には主要機関が集中していたが津波で壊滅した。また、地震で地域の地盤が約70cm下がった(現在は戻っている)。明治以降の地震やチリ沖地震の経験を踏まえて構築された防災水門も破壊され、震災の甚大さが伺える。

町職員が最後まで避難を呼び掛けた旧防災対策庁舎は、震災遺構として保存するか、解体するか検討中。

◎津波被災地域の復興支援の整備方針の分類は次の3つ…


【Ⅰ】まち機能を再編…既存市街地を高上げて生活のなりわいの場所に。住宅は高台に。【Ⅱ】まち機能を原位置復興…多重的な防護(防潮堤、防災緑地、道路の高上、宅地の高上げ)。【Ⅲ】新市街地整備…内陸に新たな市街地を整備。

◎南三陸町復興方針

南三陸町(志津川地区)のまちづくりの考え方は分類Ⅰ。造成計画・高台の一部を造成し、既存住宅を移転。移転後の土地に、土量400万m<sup>3</sup>(ダンブ70万台、東京ドーム4杯分)を用いて約10m高上げし、なりわいの再生や震災復興記念公園を構築。インフラの再編①

3. 東日本大震災における復興支援 (南三陸町における事例)

まちづくりの考え方(インフラ・土地のかさ上げ)



【問題1】…被災した住民の方に高台に移転して頂いた。今回の震災復興のために山を造成するにあたって、まず初めに行うことは何だと思いませんか？

【回答1】…土地の所有者名義を変える。土地には必ず所有者がいます。人の土地は勝手にいじれないため、まずは土地の交換や購入による所有者移転が必要です。【学生の回答は「土地の購入」(講師は一発正當に感嘆!)】

【問題2】…国道45号線(国交省管理)と新井田川(宮城原管理)の位置を入れ替えた。通常はあまりやらない手法。どうしてこのような計画を考えたのか？実現には国や県の同意が必要だったが、何故実現に応じたか？メリットは何か？

【回答2】…(国) 橋梁数の減少による設置費・管理費ダウン(県) 河川の線形改善で管理が容易(町) 土地の整形化で土地利用が良好。3者ともWin

◎事業上の課題1…多事業者の輻輳工事(国交省、宮城県、水道事業者、電気事業者等発注工事を同時調整のため、35種類にも上る会議で立場や手法が異なる組織で、各事業者がWin-Winとなる調整に腐心した。

◎事業上の課題2…土砂運搬(高台から低地部へ300万m<sup>3</sup>不足土100万m<sup>3</sup>)にあたり、国道45号線、398号線に一般車両を通しながらの土量搬入が必要で、地区内に土砂運搬の専用道路を築造して重ダンブ「最大積載量40t」を活用して運搬。また、不足土量確保に係る搬入調整(いつ、誰が、どんな土質の土を、どの程度)に奔走するとともに、各事業者と調整し、工事進捗に併せて国道、河川、地区内道路造成エリアを切り替えながら工事を展開。

◎ソフト面の取り組み(地元の方と一緒に復興・まちづくりを行うイベントの開催)

①模型プロジェクト…新しいまちの模型を地元の高校生と一緒に作る。②志津川地区現場見学会…実際の工事現場で、使用重機や進捗状況等を見学。③植樹や花植え…地元の方に参加頂き震災復興記念公園や地区内の街区公園に植樹。④橋名板プロジェクト…橋の名前を町内の小中学生が考え、志津川高校生徒が橋名版をデザイン・設置など。

5. 震災復興事業を経験しての所感

◎復興を進める上での課題(東日本大震災)

①被災市町の職員不足(特に技術者)、まちづくりの経験不足 ↓ 全国の市町からの支援、国による調査支援、URによる支援 ②広範囲かつ同時並行の復興事業 ↓ 工事に必要な、重機・職人・資材の確保が困難 ③原位置の復興が計画し困難(阪神・淡路大震災は原位置復興) ↓ 土地の高上げ、高台等への移転(膨大な事業量、事業費、事業期間)

④用地取得が難航 ↓ 全国に散らばる相続権、多量の未相続地、用地買収の専門家不足 ⑤早期復興が必須 ↓ 遅れるほど、戻るのが少なくなる恐れ ⑥住民の意向が時間の経過とともに変化 ↓ 計画が課題となる懸念。

【問題3】…昨年、南三陸町に何った際、震災復興をご経験された佐藤仁南三陸町長が、ここからの事前防災のうえでここがキモと仰せられたポイントは、上記に掲げた6つの中のどれか？

【回答3】…④用地取得。復興はスピードが極めて重要。まちづくりの経験、機械・作業員・材料の手配やお金の確保は知恵と努力である程度カバーできる。用地取得は相手がいって思うようにはいかない。今回の復興でも相当難航した。事前防災のうえで、候補地の権利状況を把握しておくだけでも、その効果は非常に大きく有効だと身をもって感じたことと仰せられた。【挙手方での回答。学生の大半が正答】

◎お伝えしたいこと

・知識や技術力はもろろんだ切だが、対話力(協調性やコミュニケーション力)が肝要！を改めて認識。事業の規模に応じて、関係者間の絡み合う事業の糸をほぐして整える「事業調整」の重要性が増す。協議を主導し各者の異なる意見まとめ上げ合意を得るには、技術力はもろろんのこと対話力が求められる。今回の震災復興事業、多数の事業者としての確かな絆・一体感があった。南三陸町の支援から3年経過しているが、今でも南三陸町の方とは連絡を取り合っている。協調性やコミュニケーションは、授業でも、大学生活でも、今後担われる仕事の間でも、知識や技術力にも増して大切と今回も強調された。

◎その他災害関連情報… 日大土木学会会報(第31号 令和4年11月号) 参照

◎学生からの感想概要

・今回もURのメイン業務は賃貸住宅との認識の学生が大半。阪神・淡路大震災支援や、東日本大震災等災害復興支援に大きく関与していることを理解している学生は少なかった。

【令和4年11月号】参照

◎学生からの感想概要

・今回もURのメイン業務は賃貸住宅との認識の学生が大半。阪神・淡路大震災支援や、東日本大震災等災害復興支援に大きく関与していることを理解している学生は少なかった。

「以下に学生の代表的な感想を紹介」

・URを引退した方も復興支援を行っていたことに敬服。R45と新井田川が何度も交差せず、位置を入れ替え整形化したのがすごいと思っ

・四省出身の留学生・2008年の四川省大地震で、耐震性が脆弱な建物が甚大な被害を受けた。日本は地震に関する技術が世界一と感

URの南三陸町の支援は、低地部は、約10m嵩上げし土地

地区画整理事業により、観光交流拠点、商業業務などの産業用地を整備し、高台部は、住宅及び行政・医療用地等を

集約整備した。復興事業の加速化のため、民間ノウハウを活用し、段階的な工事を大括り化し、まとめて発注するCM

方式を導入した。早期復興が求められる中、用地取得の難航、市町のまちづくり経験

不足、住民の意向が時間の経過とともに変化する中で、広範囲かつ同時並行の復興事

業。今後、東日本大震災の復興経験をもとに対応することが重要。

・震災から2年後の2013年、東北の3つの新聞社(岩手日報、河北新聞、福島民報

の連携活動組織「ネクストとほくアクション」で中学生

記者として南三陸の取材で被災者の声を聴いて記事にまと

めた経験が忘れられない一日であり、土木を志す起点の一つ

になっていく。野呂さんの復興の講演から得たノウハウ

の後世に伝え、有事の際に動ける技術者になりたい。

◎講演内での震災復興に関しての問いかけと回答のやり取りが、復興のプロセス等の印象付けに寄与し理解が深まった

と思います。今回も講演に對する感謝と今後に活かしたいとの思いの学生が多かった。

講演後、別室での学生有志との意見交換では、学生から復興支援のための準備は何

が必要かの問いかけに對して、3力学等基本的な教科を学ぶことが重要と伝えるなどのやり取りが交わされ、学生・講師とも有意義なひと時でした。今後の地震や、多発する豪雨災害に對した復興支援のためには、復興支援の経験

者が伝えていくことは重要と思います。

☆☆☆

昨年と今年の二年間講師を務めていただきました野呂祐介様(平成十二年工・土木卒)に講義の感想を執筆いただきましたので、ご紹介させていただきます。

【講演を終えて】

野呂 祐介



UR都市機構の震災復興支援の取組みについて、私が震災復興事業に携わった南三陸町における経験を交え、昨年に引き続き講演させていただきました。

東日本大震災の発災から十年以上が経過し、復興まちづくりが進む一方で、当時の状況を聞きしたり、震災や被災地のことを考える機会は減少しています。復興に携わった者として、かねてから記憶の伝承やノウハウの継承の必

要性を強く感じていたところであり、今回の講演は私にとっても非常に有意義なものとなりました。

南三陸町における事例紹介では、南三陸町の現地の状況を「存じない方も多いと思

い、震災の爪痕や震災復興事業によってまちがどのように復興していったのか、写真や図表を用いながら分かり易い説明に努めました。また、具

体の工事内容の説明では、土砂運搬や橋梁の架設、震災復興祈念公園の整備にスポットを当て、現場で使用した重機の紹介を交えながらお話しさせていただきました。

講演前、時間の経過に伴う防災意識の薄れを懸念していましたが全くの杞憂で、講演に對する学生の皆さんの感想文を拝読しましたが、講演内容の理解は勿論のこと、ご自身の視点から防災に対する見解や土木技術者としての決意

が述べられていたり、学生の皆さんの防災意識の高さに感銘を受け、将来を担う若き土木技術者達を頼もしく感じました。

る)、「業務の見える化(言葉と資料のハイブリッド)」、「対話力(協調性やコミュニケーション力)」を大切にしながら、これからの道を進んで行って欲しいと思います。

また、この講演を機会にあらためて東北に目を向けていただき、機会があればぜひ南三陸町を訪れ、災害に強

いまち、回遊性と親水性のある街並みをご覧ください。机上では決して得られない学びがそこにはありますので、なお、2022年10月、南三陸町に東日本大震災伝承館である「南三陸311

メモリアル」が開業しました。アーカイブズから震災の経験を共有したり、ラーニングプログラムで防災を自分ごととして考えたり学んだりできる場となっておりますので、訪れた際にはぜひ一度体験してみてもは如何でしょうか。

最後になりましたが、今回、後輩への講演という貴重な機会を与えてくださいました日大土木会の神保会長と鎌尾先生にこの場をお借りして感謝申し上げます。

◎学生の皆さんの感想文で

ご質問をいただきましたので回答と合わせて紹介させていただきます。

【Q1】URの復興支援本部は、10年以上が経った今、何をやっているのか。また、今後は何を予定なのか。復旧支援はいつか終わりがあ

ると思うのでいつまで続くのか気になった。【A1】岩手県、宮城県の震災復興支援本部は、津波被災地域の震災復興事業の完了に伴い閉所しました。現在は、福島県の東北震災復興支援本部にてアフターフォローを行っています。また、同本部では原子力災害被災地域の復興支援を行っています。

URが行う災害復興は、震災復興事業が完了したら終わりではありません。東日本大震災等の復興経験・ノウハウを活かし、地方公共団体等への事前防災に関する情報提供を実施する等、「災害に強いまちづくり」を支援する取組みを進めています。

【Q2】非常にスピーディーな復興と感じたが、UR都市機構は具体的にどのように事業をマネジメントしていたのか。

【A2】事業全体をコントロールする基となるマスタースケジュールを作成して国土交通省や宮城県等の関係機関と共有。関係機関が一同に集う毎月の工程調整会議の場で、関係機関を含めた全ての事業の進捗状況を確認・調整する等のフォローアップを実施しながら復興事業を進めました。なお、このマスタースケジュールは、URの事業の他、国土交通省や宮城県等の他事業の工程も反映させ、南三陸町(志津川地区)の事業全体の最適化を図ることを目的に作成したものです。

工程調整会議では、立場や計画、思惑が異なる関係機関と協議しながら意見をまとめ上げ、URの事業だけでなく全ての事業をいかに最適な状態でかつスピーディーに進めていくかという点に苦心しました。事業を進めるにあたり、自分達のことだけでなく相手側の視点にも立って物事を考え提案・調整する、その細やかな積み重ねが関係者との仲間意識や信頼構築に繋がりが、風通し良く同じベクトルで仕事を進められたことがスピーディーな復興に繋がったと感じています。